

『INVISIBLE RISK 3』

著: 崎谷はるひ

ill: 鈴倉 温

「ほ、本当にする気か」

「どっちでもかまわないけど？」

汐野が上目遣いに問えば、ひどく熱っぽい目に見つめられた。咎めるつもりが、むしろ変なふうに煽ってしまったことに観念し、汐野は目をつぶる。

「ねえ……ね、あっち……あっちいこう、んっ」

そして、汐野の哀願を、激しいキスに消された瞬間だった。

「悪いっ！ カバン、忘、れ——」

前触れなくドアが開かれ、帰ったはずの今瀬が焦った顔をのぞかせた。

明るい今瀬の声は、ひきつったような呼吸とともに尻すぼみになり、細い目は見たことのない色合に見開かれ、強ばる。

「い、今ちゃ……っ」

思わず息を飲み、あわてて唇をほどいた汐野の顔を、咄嗟に杉本が胸に抱きこんで隠すようにした。

(うそ)

あまりといえばあまりな露呈のしかたに、がくがくと震えだした汐野の耳に、今瀬の思わず、といった声が聞こえた。

「げえ……っ」

叫びと同時に、乱暴な勢いでドアは閉められた。

後味の悪い、奇妙な沈黙だけが、その場に残され、汐野は凍りつく。

(……げえって。なんだ、それ)

吐き捨てるような今瀬の声に、ざっくりと切りつけられたような感覚を味わって、汐野はかくりと膝を崩した。

「おいっ」

へたりこみそうな汐野を、杉本の腕だけが支えている。真っ青になった汐野を覗きこむ杉本の顔にも、わずかな狼(ろう)狽(ばい)があった。

ばれちゃった、とつぶやいた汐野の声は渴き、別人のように頼りない。

「ど……どうしょ……どう……」

目を睜り、すがるように腕を掴む汐野を、苦く唇を歪めた杉本はしっかりと抱きしめる。

「大丈夫だから、落ちつけ」

「おち、落ちつけって……だって！ どうすんの、だって！」

「汐野ッ！」

苛立ったように怒鳴られ、びくり、と汐野の身体がすくむ。すぐさま、杉本はしまった、という表情を浮かべた

「悪い」

低い声で謝る杉本に、虚(うつ)ろな声で汐野は答えた。

「うん……うん、いい」

子どものように首を振りながら、杉本の腕を逃れると、乱されたままだった服を直しながら、きつく唇を噛む。

「汐野」

追いかけてようとする長い腕を、見ないふりで振り払ってしまったことには気づいても、頑(かたく)なに目を伏せる以外になにもできはしなかった。

緊張をはらんだ沈黙が落ち、互いの顔を見れないまま押し黙る。

恐ろしいほどの不安がのしかかり、汐野は幾度も深いため息をついた。締めつけるような心臓の鼓動は、先ほどまでのあまさなどかき消えた、どす黒い血液を送りこむ。

杉本は座りこんだまま、すさまじい勢いで煙草をふかしていた。

たったいま、あの腕から逃れたのは自分のほうなのに、抱きしめられていないことにぞっとするような恐怖を感じる。

どうすればいいんだろう。それだけが頭をぐるぐるとまわり、さっきまで手のひらにあたためていた広い背中がやけに遠い。

怯(おび)えた視線で杉本を見つめれば、なにごとかを考えこむようにきつく眉(み)間(けん)を寄せている。

(なにか、言って)

重苦しい空気に耐えきれず、開いた唇からはわななく吐息しかこぼれない。

(頼むよ……なんか言って、なんでもいいから……！)

ふたりの部屋で、ひとりきりにされてしまったような虚(むな)しさを噛んで、もういちど開きかけた唇を汐野は震わせる。

口角がひりひりと痛み、忙(せわ)しなく舌でそれを湿した。

「あ……」

いま、なにか言葉を発したら、すべてが壊れてしまうような気がする。

そんな張りつめた空気のなか、それでも沈黙に耐えかねて息を吸いこんだ汐野を、振り向いた杉本は、視線で制した。

しばらくの間、まるで睨むような視線を交わしあって、息苦しさに汐野はあえぐ。

そして、均衡を崩すまいとするようにそっと、杉本の右手が伸ばされた。

おずおずと近寄ると、色をなくした頬に指先が触れた。

「汐野」

輪郭をたしかめるような触れかたに、息がつまる。名を呼んで、幾度も幾度も、硬い指先は頬を滑っていく。ささくれたような神経の高ぶりをなだめる指に、大きく肩で息をした汐野の耳元に、杉本はそっとささやいた。

「好きだ」

「……っ」

慰めでもなく、落ちつかせるためのものでもなく、ただ、「好きだ」と、杉本は何度もささやいた。ある意味では不似合いな、だがこのときなによりも欲しい言葉をささやかれ、凝(こご)っていた血の流れがわずかにゆるめられる。

あたたかく潤んだ吐息が、彼の頬をかすめていく。きつくしがみついた細い身体に、痛いほどの抱擁が絡みついた。

「好きだぞ」

「うん。……うん、うん」

にじんていく目元を彼の肩に押しつける。

もう泣かないと言ったけれど、心がとろけそうなほどにやさしくささやかかれて、こらえろというほうが無理じゃないかと汐野は唇を噛みしめた。

しがみつき、うなずきながら、それでも去ったわけではない不安にひるむ心を、杉本が静かに抱きしめてくる。

そして、勢いをつけるようにぽん、と汐野の肩を叩き、玄関のドアに向かって声を投げた。

「入ってこいよ、こっちはもういい」

「え……？」

庇うように汐野の肩を抱いたまま、落ちつき払った声で、杉本は言った。

「まだ、いるんだろ。——今瀬」

無言のまま、立てつけの悪いドアが軋んで開く。

強ばった表情のままの今瀬が、そこには立っていた。

目を見開き、離れようとする汐野の肩を杉本は痛むほど掴んで、離さないままでいた。

本文 p33～38 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>